

よか ネット

No.52 2001.7

(株)よかネット

もくじ

NETWORK

- 地域で考え、行動するためのシステム形成
～地域コミュニティづくりの取り組み～ 2
- ひともうけ通信6 “平凡・常識教”を、私に納得させてくれた
恩人・藤野良幸先生のこと 4
- 安全でおいしい“つまんでごらん”の卵は高くても需要がある
～専業農家大いに語る。第2回～ 6
- (協)地域づくり九州“交流会員”を募集中
テーマを持ち寄って、「コノユビタカレ」方式で 8
- 金基衡先生と糸島で交歓 9
- 皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介① 9
- 地域データ散歩7 「片親と子どもからなる世帯が増えている」 11

見・聞・食

- 自分が「できること」を持ち寄って仲良くなろう
～パールレッツプラン主催の地域通貨講演会に参加して～ 13
- 筑豊を知り、もっともっと好きになりたいという思いから生活情報誌が
生まれた～「筑豊くらしスバイス」の取り組み～ 15
- 琉球舞踊を堪能しにいく「めでる華ごころ」 16

近況

- 今年も多くの方に集まっていただきました
～第9回よかネットパーティー報告～ 17
- お金と手間をかけないお手軽国際交流活動 19
- 甘夏の怪一 また 20
- 『山の郵便配達』という映画を見た 21
- 審査される側から審査する側に
～マンション大規模修繕の業者説明会で感じたこと～ 21

本・BOOKS

- 「シリコンバレーのつくり方」 22
- お知らせ 22

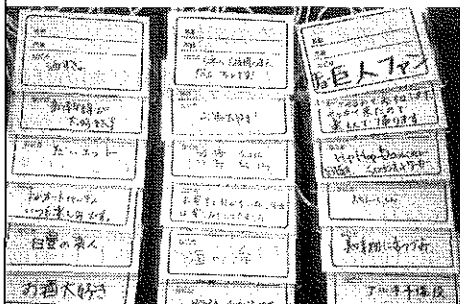


笑顔の輪が広がりました

～第9回よかネットパーティー～

- ①楽しい話に花が咲く
- ②今年も登場、糸島産ソバ
- ③好評だった本場のチャンポン
- ④山の達人による、わさび講習会
- ⑤ご自分の名札を書いてもらいました
- ⑥皆さんの自己アピール

①	②	③
⑥	⑤	④



地域で考え、行動するためのシステムの形成 ～地域コミュニティづくりの取り組み～

伊藤 聡

地域コミュニティの希薄化が様々な社会問題の大きな要因だ、とあちこちで言われる。都市では例えば人口の流動のため、ベッドタウンでは地域になじみが薄いため、農村部では若者や子供の減少のため。

その裏返しとして、地域の教育問題、高齢者や子育てなどの福祉の問題、廃棄物の問題、生活環境の問題などを解決しようとするれば、必ずと言っていいほど地域コミュニティの形成、あるいはコミュニティ活動の活性化が対策として挙げられる。

●行政が肩代わりしてきたものを再び地域へ

なぜ、最近コミュニティの再生なのかというと、大まかにいえばこうである。福祉、教育、子育てなどは以前は家庭や地域の中で面倒をみ、解決してきた。それが核家族化や近所との付き合いが薄れる中で、その面倒をだんだん行政が肩代わりするようになった。しかし、自治体も財政難であり細かな要求に限りなく対応していくことはできない。そこで、地域でできることは地域でやって欲しい、その仕組みを作りたいのである。

コミュニティの単位のひとつとして、地縁による自治組織がある。名称にはばらつきがあるが、旧自治省の調査（平成9年）によると全国での呼び名は「自治会」34.1%、「町内会」23.7%、「区」14.7%、「部落会」7.7%等となっているので、ここでは代表して「自治会」と呼ぶことにする。

自治会は、歴史的には明治の大合併のとき、旧町村を行政サービスを補完する組織として整備され、行政の末端組織としての役割を担ってきた。戦後、占領軍の下で一旦解体させられたが、日常生活の維持に必要性が高かったためかすぐに再組織されている。再組織後の経緯にもよるが、現在、自治会は行政からは独立しており末端組織ではないとする市町村も少なくない。

そもそも自治とは何か、という部分では、「自立と自己統治の結合形態」とされているものがあるが、別の言い方でいうと「自己責任・自己決定・自己実現」ということになる。

●自治会は本来の機能を果たせなくなってきた

自治会の機能には本来次のようなものがあるとされている。

- ①親睦（相互連絡、レクリエーションなど）
- ②共同防衛（防災・防犯など）
- ③環境整備（地区清掃、施設管理など）
- ④行政補助（広報などの伝達、募金）
- ⑤圧力団体（行政への陳情・要望）
- ⑥地域の統合・代表
（自己の名を持って地域を代表）
〔「地縁組織論」山崎丈夫著より〕

しかし、自治会がこのような機能をだんだん果たせなくなっている、あるいは偏ってきているところが、地域コミュニティ問題と深く関連している。リーダーになり手がいない、高齢化した、区長が名誉職化している、役が当番制で嫌々まわってくる、などによって自治機能が縮小しているところがみられる。一方で、区長がいわゆる長期政権化して、大きな発言力を持っているという場合もある。ただし、組織の問題が先か、住民同士のつながりが先かというのは一概に言えない。もちろん、自治会が十分に機能し、特に問題のないところも少なくない。

自治会の現況と課題は、地域によってかなり差がある。農山村地域などの、戦前から続く自治会（当時は町内会や部落会の名称が中心）では、現在の市町村よりも歴史が長い。このような自治会では、例えば後継者不足等に対しどのように自治機能を維持していくかが課題となる。また、近年の開発団地などでは、居住者同士の横のつながりや行政との窓口を持つなどのために自治会が形成される。自治に対する意識も、自ずと差が出てくる。

●地域の自治能力を高めるための組織化

地域コミュニティの再生、あるいは地域活動の活性化のための対策としては、自治体によっていくつかのパターンがあるようである。大きくは以下のように整理できると考えられる。

- ・新組織移行型（自治会等の既存組織を新しい組織に移行させる）

- ・新組織併存型（既存組織を生かしながら同じ地区内に新しい組織を設置する）
- ・中間組織設置型（校区や旧町村単位など、自治会と行政の中間的な組織を設置する）
- ・既存組織活性化型（既存の自治会や地区公民館活動を活性化していく）

方法はいくつかあっても、持っていきたいのは「地域の自治能力を高める」ことである。これらの活性化の取り組みについて、事例を通してみたい。

●公民館活動を自治の中心とした綾町

宮崎県綾町は、照葉樹林のまちや手作りの里として有名であるが、地域においては自治公民館を中心とした活動を展開している。中心というより、公民館組織が地区組織であり、自治会等がない。地区の長は公民館長である。

これは昭和40年代に当時の郷田町長の政策によって、それまで地区には区長と公民館長がいたのを公民館長に一本化したからである。その理由は、区長は地域の一部の人の意見を代表しているだけであったこと、行政の意向が区長を通じて住民に伝わっていなかったこと、一方の公民館長は住民選出で住民の意見の吸い上げができたことなどであるが、最終的には当時両方に補助金が出ていたのを財政難のために一本化したかったことが大きいようである。

しかし、これらの問題はどこでも似たようなものであり、区長制の廃止まで持ち込んだのはやや強権ではないかという気もする。今の役場の方にその辺りを聞いても、綾町にとっては公民館制が普通であって、一般にいう区長制がどういふものか捉えきれないということであった。

先ほどの活性化のパターンでいえば、「新組織移行型」にあたる。

綾町は人口約7千人で、22の自治公民館がある。自治公民館は、町立の公民館とは別の地域住民の運営による公民館である。自治公民館の役割は生涯学習や花いっぱい運動などから健康教室の実施まで、地域の自治活動に関わるほとんどのことを行っている。

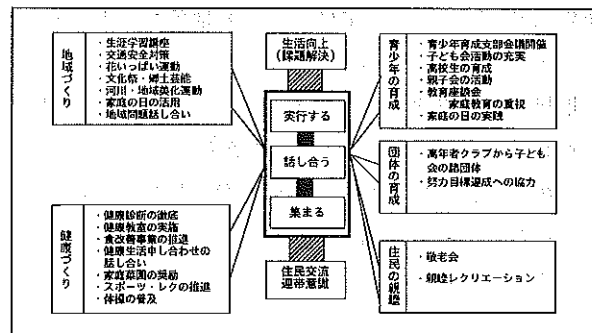
●地区の文化祭が商品開発の地区予選に

綾町の公民館活動で盛んなもののひとつに地区の文化祭がある。毎年11月の日曜日を中心に22の公民館がそれぞれ文化祭を行う。ここには、各種の講座などで製作した作品などを展示するほか、各家庭で作っ

た農産物や加工品なども出され、バザーも行われる。文化祭には他の地区の人はもちろん、町外・県外7人も訪れ、加工品などの品評会のようなことも自然と行われる。そこで「これは『ほんものセンター』で売れるのではないか」といった話が出てくる。『ほんものセンター』とは商工会が運営する農産物等の直売所である。実際に直売所に出品し、ドレッシングなど人気商品となったものもある。

このように、地区の文化祭がいわば商品開発の地区予選のような役割も担っている。これが高齢者を始めとする地域住民の生きがいと収入の元になっているのである。

綾町の公民館活動内容



●97行政区を8地区にまとめた宗像市

宗像市は福岡市と北九州市の中間に位置し、両都市圏のベッドタウンとして大きく成長した人口約9万人の都市である。行政区は全部で97あるが、昔からの農村集落もあれば、昭和40年頃に開発された団地からできたばかりの団地まで自治会の性格は様々である。

少子・高齢化や核家族化の中で、小さな区などでは住民需要に対応できなくなってきたため、宗像市では広域的なコミュニティ範囲を形成しようとしている。広域のコミュニティ範囲は、地域になじみの深い小学校区（旧町村に近い）を中心とした8地区を設定した。前述のパターンでいうと「中間組織設置型」といえる。8地区のことを以下「地区コミュニティ」と呼ぶ。現在は3つのモデル地区を先行的に推進している段階である。

地区コミュニティには運営協議会が置かれ、地区内の区長、公民館長、子ども会、老人クラブ、婦人会などの代表による運営委員会、役員会、執行部会などがある。協議会としては、運営委員や役員はボランティアであるが、事務局に専任の事務員数名がおけるよう活動費800万円の補助が市から出ている。協議会の活動内容は、公民館活動、青少年育成、健康福祉、環

境整備など地区の自治に関わる活動全般である。

既存の区長等はそのまま置かれ、行政区もひとつの単位として生きている。地区の祭りなどは、今後も区の中でやっていくか、地区コミュニティの祭りとして広げていくかなどについて各協議会で話し合っていくことになる。ただし、行政への要望などは基本的な形として地区コミュニティを通し、まとめた上で要望を出す。

●地区コミュニティと行政の窓口を一本化

行政側の対応としては、行政区に対しこれまで各課でバラバラの対応をしていたが、新しくコミュニティ課を設置し、地区コミュニティとの窓口として一本化を目指している。現在はまだ移行期間であり、コミュニティ課がまとめながら各課で対応している。地区の要望も97行政区からではなく、8地区でまとめられたものがあがってくるようになる。

地域への補助金等も、将来的にはコミュニティ課から地区コミュニティへと一本化され、地区コミュニティの中で行政区や団体等への配分を協議していくことになる。つまり、何にお金を使うかは地域で決められるようになる。

また、地区コミュニティの拠点として、各地区にコミュニティセンターの設置を進めている。既存の公民館等を活用する地区もあれば、新規に建設している地区もある。建設費には市の単費で補助が出る。これまでの公民館的な機能に加え、地区の情報拠点、住民票発行などの行政サービスの提供、各種公共施設とのネットワークなども想定されている。

●住民ニーズを捉え、地域活動に反映させる仕組みづくり

綾町も宗像市も、また他の市町村も、コミュニティ活性化の基本は「地域でできることは地域でやるように」である。そのため、地域においては住民ニーズを捉える仕組みづくり、企画し考える仕組みづくり、実際に活動できる仕組みや組織づくり等を進め、また行政にとっては補助金等を整理する、というのが具体的な取り組みになっている。さらに、行政職員も地域に入ってアドバイスなり手伝いをする、というのもポイントである。

次号、さらに他の自治体の事例を紹介したい。

(いとう さとし)

ひともうけ通信 6

“平凡・常識教”を、私に納得させてくれた — 恩人・藤野良幸先生のこと —

糸乗 貞喜

藤野先生は、私の人もうけの原点になっていただいた方である。3月10日に「藤野良幸先生を偲ぶ会」があった。亡くなられて、八年経つと聞いて、我ながら人情の薄いことだと思った。

●古墳のないところは、昔の人が住んでなかったということやから、開発適地やないということや

藤野先生というと、私はふたつのことを思う。ひとつは「ひともうけ」のキーになっていただいた方としての、楽しい「思い出」であり、もう一つは、先生の命を縮める（偲ぶ会の出席者からでた言葉）こととなった銀行との関わりの、やりきれない「思い」である。偲ぶ会で十七人の出席者が、それぞれの思い出を語るようになった時、私の話すことは決まっていた。それは「ここには古墳があまり無いやろ、ということは人があまり住んでなかったということや。つまりな、水が良うないちゅうことや。ここは中国山地の外れやろ、金気がでる水しかないのや。だから、あの辺の土地買っ

ても、水が問題やぞと言うてたやろ」という言葉である。

この時「えらい、ええ加減なことを言う人やなあ。けど、分かりやすいなあ。でも、こんなことで通るんかいな」と思った。この仕事は兵庫県下の工業団地の「水対策」の仕事で、私は勉強のつもりで委員会に出



偲ぶ会に集まった門人の面々



藤野良幸
先生

させてもらっていたような状況であった。この会議で兵庫県の金井さんに会って、その縁でたくさん仕事をさせてもらうことになった。本誌の前々号の「ひともうけ通信4」のなかでとりあげた「但馬のメシとオカズ」の話の元になった仕事も、その一つである。

「そんないい加減な」と思われるといけないので、もう一人証人をあげておく。それは先生の息女である北村佐津木さんの「父はコンサルタントの仕事を受けるときは、結論ができるまで大変苦しんでいた。そして、自分は畑違いから入ったので、専門家ではないとも言っていたし、“当たり前のことしか言わないのに、それでも感心してくれるんや”とっていました」という話である。

藤野先生は、もちろん「ええ加減な」仕事をする人ではない。上記のようなことを言いながら、現場重視で、実証的で、説得力のあるデータを作ろうとする人だった。上の言葉は、大規模な開発適地が、そう都合よく転がっている訳はないということを、言いたかったのだと思う。

日常の思い出としても、何人かが電車で出かけるときに、私が自動券売機で全員の切符を買おうとしていたら「糸乗君、こんなんはな、銘々が買えばいいんや。これはな、仕事を分散して(全体としての) 負荷を減らすシステムなんや。切符代もしれてるから、それぞれ負担したらいいんや」と言われた。当時は、同時に何枚も買える券売機はなかったので、一人で全員の分を買っていると、全員が待たされることになり、かえって都合が良くないことではあった。しかし、こちらからは「はい、皆さん切符を買って」というわけにはいきにくい。これが藤野先生にあうと、きわめて素直で合理的な解決策がでてきた。

こんなことを書いていると、つい目の前に浮かんでくる状況がある。委員会などでは実によく「居眠り」をする人だった。報告などほとんど聞いていないはず

<藤野良幸氏略歴>

大正 6 年 9 月	奈良県橿原市八木に出生
昭和 16 年	大阪帝国大学理学部物理学卒業 (伏見康治先生に師事)
昭和 17 - 20 年	陸軍気象部にて高層気象及び天気観測・予測に従事
昭和 20 - 24 年	中央気象台 (現気象庁) 大阪管区気象台にて高層気象観測・天気予報担当
昭和 25 年	近畿地方建設局企画部勤務、洪水予報担当技術者として採用
昭和 37 年	総理府近畿圏整備本部設置にともない水問題担当調査官以後、近畿圏の治山・治水計画及び地域計画を担当するとともに、行政、コンサルタント等の指導に当たる。
昭和 37 年	近畿圏整備基本計画 水部門原案作成
昭和 39 年	琵琶湖自然環境学術調査 (京大・宮地伝三郎)
昭和 41 年	京阪奈丘陵住宅地開発調査 (京大・西山卯三)
昭和 44 - 48 年	琵琶湖総合開発調査及び総合開発特別措置法の調査検討
昭和 46 - 50 年	播磨内陸都市圏計画 (神大・米花稔)
昭和 48 - 57 年	退官の後、財団法人都市調査会専務理事に就任
昭和 49 - 51 年	京阪奈丘陵調査 (西山・長尾・藤野先生)
昭和 50 年	財団法人関西空港調査会設立
昭和 52 年	関西学術研究都市調査懇談会設立事務局担当委員
昭和 56 年	スバルプラン (近畿創世計画) の設立

なのに、ポイントの所になると適切な意見を言われた。この先生が大変な災難に遭われたのである

●日本の銀行の悪習・連帯保証で命を縮められる

藤野先生を「経営者」だと思っていた人はいなかったと思う。水問題、環境問題、地域開発についてすぐれたプランナーではあったが、金の貸し借りなどの経営ができる人ではなかった。その人が立場上、財団法人の専務理事になったり、株式会社の取締役(?) になったりすると、銀行はしやにむに連帯保証のメンバーにしてしまう。そしてその会社が倒産したのが1983年のことである。

私にはつらい思い出がある。倒産の数ヶ月前だったか、藤野先生に「一月だけ一千万円貸してくれ」といわれた。「大体この人は、資金繰りには関係のない人なのに」と不審に思いながら、社内で相談し、送金した。相談したとはいえ、最終の意志決定の責任は私にあるという、暗黙の社内状況になっていた。案の定、一ヶ月経っても返らない。「もうちょっと待ってくれ」ということが何回か続いた。私は意を決して、「先生、この金は取引と全く関係のない金ですから、とにかく一度返して下さい」といった。その時は資金繰りが、どうにもならない状況だということは、私にも分かっていた。一月ほどしてだったか、銀行に振り込んだからという連絡を受けた。とにかく返してもらったのである。そして一月以内ぐらいに、資金繰り破綻で、手形が不渡りになってしまった。何十億という負債総額の中では、一千万円ぐらいのお金はどこに行ったかわからないぐらいのものだろうし、どこかの貸金業者に

少し入ったぐらいだと思う。かなり強硬に言って返してもらったので、私も先生もつらかった。しかし、よい人間関係は残すことができた。

ただ、倒産後、私どもの事務所の顧問として、わずかな金額ではあるが、月々送らせていただいた。“貧者の一燈”のつもりだった。

あまり、保証人としての意識のない連帯保証のために、その後先生は苦しまれたのだと思う。

私は聞いても力になり得ないことなので、その後のことは何も聞いていない。

私自身、会社の資金繰りの責任者として、担保はもちろん、「個人保証」で、いつもがんじがらめだった。前号にもふれたが、個人保証というのは、死ぬ以外に逃れられない仕組みである。

昨今、銀行が大口の負債を棒引きにしている。一社に対して、何千億円である。大銀行の債権償却総額が何十兆円ということである。その間の、庶民の預金の金利は、ほとんどゼロになっている。個人の金融資産が日本全体で1,200兆円とも1,300兆円とも言われている。1%の金利相当分が12～3兆円になるのに……。

藤野先生の亡くなられたのは、1993年だった。先生の亡くなられる2～3年前だったかも知れない。京セラの“サムライ”というカメラが出た年に、長いことお世話になったということで、サムライをお届けした。しばらくして、「おたくのおかげでな、カメラを持って外にでる癖がついてな、身体が元気になったんや」といって写真を見せに來られた。それがお会いした最後の機会だった。

私は、大体三つの仕事をしてきている。一つは都市再開発などの事業的なこと、ふたつ目は都市開発、もうひとつが農村計画である。都市開発の仕事はほとんど藤野先生に負っている。都市開発といっても藤野先生のは山から海までつながっている。典型的な例は寝屋川河川公園で、「今、田圃がなくなったのやから、そこが受け持っていた保水力を池でもたせたらいいんや」といって遊水公園をつくられた。とにかく“ええかげんな”ことを言う人だった。バブルの頃、私は「最終需要のないものが、本当に実現するはずがない。今言われている開発話は全部大ウソだ」といって、全く踊ることがなかった。これも、平凡・常識教に入っていたからである。（いとりのり さだよし）

安全でおいしい“つまんでごらん”の卵は高くても需要がある

～専業農家大いに語る。第2回

愛甲 美帆

4月19日、「専業農家大いに語る会」の第2回会合がもたれた。今回お話しをして下さったのは、佾緑の農園、代表早瀬憲太郎さん。糸島半島の志摩町で、直売店を併せ持つ養鶏場を営んでいる。卵の名は「つまんでご卵」。なんだかかわいくて、心をくすぐられるこのネーミングと、早瀬さんの卵に対する熱い思いに引き込まれてしまった。以下お話をまとめてみた。

●養鶏を始めるきっかけ

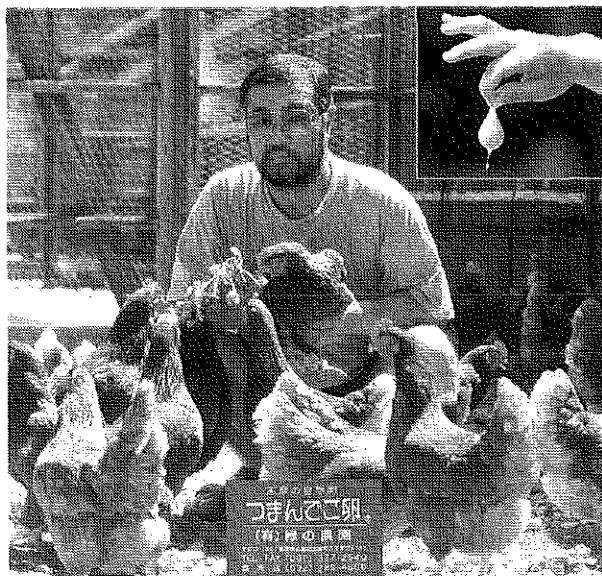
・もともと鶏が好きだった。大学の農学部で学んでいたころ、稲の育種を研究して、鶏も勉強した。卒業後は3年間漫画家をしてこのままプロを続けることも考えたが、その後、高校の理科の先生を経て、アメリカからハイラインという品種の鶏を輸入し販売する総合商社に入社した。

・ここは鶏だけでなく、畜産に与えるワクチンや、鶏舎の設備も扱う養鶏産業の草分けで、仕事で日本各地の養鶏を始めとする畜産産業を見て回ることができた。この頃、自分は卵を食べようとは思わなかった。冬場になると人間が風邪を引くように、鶏もウィルス性の風邪を引く。それが広がらないように抗生物質の投与を続けるため、鶏は薬漬けになる。耐性菌は約1カ月でできるし、更に強いウィルスが現れてしまい、ウィルスとのイタチごっこになってしまふ。ある養鶏場の主人はいくら自分のところの卵が余っていても薬漬けだということを知っているので食べないという。そうしたこともあり、卵は自分の目で見て信頼のおける養鶏場から直接購入していた。

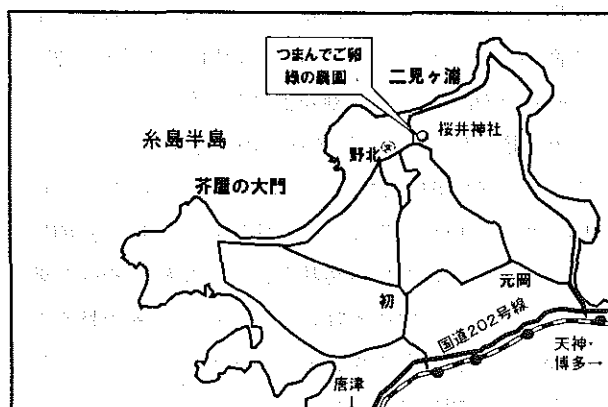
・38歳の時、腎臓病にかかり、人工透析を受けることになった。会社はポストを用意してくれるといってくれたが、自分がやりたいことは何かと考えたときもともと鶏が好きで、鶏が飼いたかったのだということに気づく。定年後にと描いていた夢だったが、今がチャンスと思って実行することにした。

●最初は道楽扱いだった

・場所は奥さんの実家が福岡市西区ということで、夏休みにはよく遊びに行き、気に入っていた糸島半



左：写真が早瀬さん
右上：緑の農園までの地図



概要

名称	(有) 緑の農園
設立	平成元年
場所	福岡県糸島郡志摩町桜井4767
営業時間	9:00~18:00 休みなし
備考	日曜日には一般客に鶏舎を開放している

島を選んだ。霜が降りないということも条件に合った。これが平成元年のことである。

・その頃から、世間では有機農業ブーム。元同僚の友達も鶏を平飼い（地面に鶏を放して飼う）して、消費者グループに卵を卸す事業をしていて、結構売れていた。これを知って、志摩町で5反の土地を買って、鶏の平飼いを始めた。

・養鶏場ということで地元の理解を求めるのは大変だった。当初は公害はないと説明しても、臭いがあるということで、集落で反対会議がもたれたこともある。絶望的になったが、200羽に羽数を減らすと申し出たところ、近所のおじいさんが「200羽なんか道楽ばい」と言ってくれて、ようやく飼うことができた。

・鶏はストレスと病気になる割合が比例している。運動ができる広さを確保し、鶏に体力的なストレスを感じさせない環境を作ったので、卵にも良い影響を与えている。また、鶏はよくイタチに襲われるというが、イタチは卵を1個食べられれば、雛や親鳥を狙うことはない。逆に、ネズミが寄らなくなるので、歓迎だ。緑の農園ではイタチと鶏の共生ができる。

●安心な食べ物を食べたい

・つてで売り始めたが、卵の評判は良く、その当時、餌は普通のものだったが、地面に鶏をおろしただけ

で、他の卵と味が違うことに気づいた。

・もともと、腎臓病が子どもへ遺伝することを心配していた。食べ物に含まれる添加物や残留農薬の問題について考え、卵だけでは、自分の使命を果たしていないと感じ、「緑の農園」として、自分、家族、お客様に卵と一緒に安心な食品の配達を始めた。

・野菜は、家庭菜園のような作り方をされている方に作ってもらったり、志摩町に、本物の醤油を作っている人がいたり、糸島半島内で手に入れることができた。それでもない場合は全国ネットで探し、2年間でほぼ日常生活に必要で安全な食料品が手に入るようになった。

●12年間のノウハウを活かしフランチャイズへ

・「つまんでご卵」は、比較的少数の羽数で平飼いし、餌も自分で配合したのを与える養鶏方法で生産された自然卵である。主な特徴として、

①腐らない、基本的に無菌卵である。

（夏場でも常温で4カ月保管できる）

②高品質である。（黄身をつまんで持ち上げることができ、卵独特のニオイがない）

③低コレステロール、低アレルギー卵である。

④薬剤を使わずに生産した卵である。

が挙げられる。ここでは1個40円で販売している。

・売上げの割合は自店、宅配、スーパーへの卸しが1/3ずつ。産直の雑誌やテレビで紹介されたことで、

全国から注文が殺到するが、1カ月待ってもらう宅急便のお客さんもいる。それでもリピート率は8割。さらに長期に渡って5割が継続して注文する。

・その背景には、東京・福岡などの都市でアンケート、をとると約55%の主婦が「高くてもいいからいい卵が食べたい」と答えるが、実際にこういった卵は流通していないという現状がある。主婦はやはり敏感なようだ。一般に流通しているのは赤玉の特殊卵だが、この特殊卵の場合も、餌にビタミンなどを混ぜたケージ飼いのものも多いようだ。

・平成13年4月現在、約5,000羽飼っている。本当はもっと経営規模を広げたいが、土地取得などが大変だ。むしろ、平飼いで様々な問題を克服してきたノウハウをもってフランチャイズ方式もあると考えた。

・今は志望者を6カ月研修で受け入れている。現在数名の方が修行中で、半分は脱サラの方である。技術を身につけ、土地さえ見つければ(これが難しい)、既に卵の特徴(品質)、「つまんでもくずれない」というデモンストレーション、ネーミングというこの3点は、かなりインパクトがあるので営業の心配はいらない。九州全体で50万羽くらい飼っても需要はあり、品質で負けはしない。

●時代が味方をしてくれた

・実は商社時代このような養鶏をされている人に出会った。しかし、当時の社会には早すぎたのか、早瀬さんの目にも「変わった人」に映った。12年前、将来は自然卵の競争になると感じ、人より絶対良い卵を作ろうとスタートしたときは、やはり「変わった人」という目で見られた。しかし、その信念を持ち続けられた今日、時代が動いてきた。ヨーロッパではケージ飼いで鶏の飼育を禁止する国もでてきて、平飼いの良さを見直す動きが強い。

・今後は、平飼いで大量飼育システムが開発され、価格競争になると自分はみている。その時に、競争に飲み込まれないよう、品質のさらなる向上とお客様とのつながりを大切にしたい。

●これは行って自分の舌で確かめなくては!

後日、私は友達とお店に行ってみた。あいにくその日は雨だったが、駐車場には整理の人がつき、店内もお客さんで一杯。ソフトクリームもおいしいと伺っていたので、早速食べることにした。このソフトクリーム、口にした瞬間は濃厚なのに後味すっきり。初めて

の味だった。昼食後に行ったので、5人で1個にしようとしていたが、その食感に結局、各自1個ずつ食べてしまった。また、卵かけご飯も味わった。

早瀬さんは、「今日の来客数はうちの限界を越えています」と言いながらも、一人一人に声をかけて話をされていた。このような人柄がさらにファンを増やされているのだらうと思った。(あいこう みほ)

(協)地域づくり九州“交流会員”を募集中 テーマを持ち寄って、「コノユビタカレ」方式で

代表理事 糸乗 貞喜

前号でお知らせしましたが、(協)地域づくり九州が活動を開始しました。

・3月30日 経済産業省九州経済産業局 認可

国土交通省九州地方整備局 //

・4月27日 設立披露パーティー

・6月1日 メルマガ1号発行

パーティーには100人以上の方が来られました。はじめに糸乗が「①組合は“ひとつうけ”集団になって、協同のパワーと知恵で地域に密着した仕事をしたい。②協同のよさを生かして、一人や一社では出来ないことに取り組みたい。成算のないことにもチャレンジしたい。③交流会員を当面500人、将来は5,000人にしたい。多様な考えや情報が集まって、その中からテーマやニードをくみ取り、商品や仕事を見つけていきたい。会員にはメルマガを送りたい」と述べました。

ついで、東京から参加していただいた(協)街づくり総合研究所専務理事の稲垣さん、九州大学の今里さん、福岡県商工部の久保さん、国土交通省九州地方整備局の大竹さん、経済産業省九州経済産業局の佐伯さんから、励ましの言葉をいただきました。それは次のような言葉でした。

○幅広い知恵を集めて、仕事を進める仲間のネットワークを全国につくって、ともに頑張ろう

○これからは、産学官の協力ということだけでは不十分で、もうひとつ市民の参加がないと本物にならない。市民を加えた産学官民が協力するような取り組みをせよ

○今の経済不況は、みんなで知恵を集めてワイワイやっていくような取り組みが大切だ

○都市づくりの仕事は、多様な問題があるので、それに

対して幅広い切り口で対応して、問題解決にあたり
○知識集約型産業の中で、新しい付加価値を生み出す
ような取り組みのモデルになって欲しい

そのあと、メイ建築研究所の青木先生の挨拶を受けて乾杯になり、早速飲み物を片手に交流が始まりました。

私どもは、組合員のために作った組織ということで、とにかく組合員企業の力をつけるのが第一です。そんな気持ちをもって全部の理事と幹事が壇上に上がり、それぞれの抱負を述べました。予想以上に沢山の方々に来ていただき、組合委員企業の従業員を含めて、“元氣”をいただきました。お開きは、当組合幹事の松崎さんと簗原さんの“博多一本締め”で締められました。

(いとのり さだよし)



組合員企業を売り出すため全員が壇上よりあいさつ

金基衡先生と糸島で交歓

糸乗 貞喜

金先生は毎年5月に、有田焼の陶祖李参平をしのぶ「陶祖祭」に、韓国陶磁器文化振興協会の会長として参加しておられます。今年は九大の森永先生の依頼もあり、陶祖祭の後日に九大で講演されることになっていましたが、空いた日に「糸乗さんがどんなところに住んでいるか、また、百姓というがどんなことをしているか様子を見たい」という連絡が入りました。三月以来FAXが行き来して、5月6日に糸島の糸乗宅に見えました。その日は九大の移転予定地や、怡土城跡（ここには白村江の戦いのあとで、日本と百済がつくった土塁がある。これは太宰府の水城と連なるもので、高さ数メートルの大防壁である）、糸島半島一帯、“つまんでご卵”という卵専業農家の早瀬さんの所（本誌P6参照）などを廻り、金先生は大土塁と高品質卵に、多大なる興味を持たれました。



金基衡先生とわが家の前で

夕食は糸島名物の鳥料理をいただきながら、九大の森永先生、坂口先生、樋口先生夫妻、（株）よかネットの山辺、尾崎などと歓談しました。

金先生とのご縁は、今鳥取大学にいる霜田さんが、十五年ぐらい前に筑波で講演を聴いたとき「帰りに大阪を回られるなら、そちらでお会いできれば」といって、私も含めた十数名が、懇談させていただいた時からになります。その後、“じねんシンポジウム”にも来ていただいていた、夕食の席でも思い出話ができました。

九州でも、宗像大社に行ったり、太宰府に行ったりと、何回かお会いしています。

(いとのり さだよし)

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介①

NO.51に同封していたハガキで、様々な御意見、近況などが寄せられました。今月号（NO.52）、9月号（NO.53）の2回にわたり、その一部を紹介します。（順不同、敬称略）

■63歳で新規ビジネスをスタートした老人性新人類です。よかネットパーティ寸評…花よりダンゴ(?)の感あり。次は各テーブルに花を盛りましょう。でなければ着物を着た博多美人を。

(大阪市 西村多久満)

■今年3月「北波多村の歴史と自然を守る会」を発足させ、4月より文化財の保護と自然環境を守るためのパトロールを始めました。

(佐賀県北波多村 石崎 俊治)

■身近な地域のこと、日常生活のことなど、見過ごしがちなことに、いろいろな切り口からスポットをあて、それなりの答えを出しておられる。自然体から

の提言など素直に受け入れられます。「よかネット」誌の到着が楽しみです。(佐賀県鳥栖市 陣田和孝)

■今年1月の省庁再編により国土交通省が発足しました。地方建設局は地方整備局となり新たに都市計画や補助事業を担当することになりました。私自身は中部地方整備局都市調整官としてまちづくり、地域づくり関係の仕事をしています。引きつづき宜しくお願いします。(愛知県 水谷 明大)

■糸乗さんにお会いしてからほぼ30年になります。当時「人口2万人の痛みの分かる町づくり」のお話を伺いました。いま直面している地球環境やエネルギー問題を思うと、当時が懐かしく回顧されてきます。いつまでもお元気で、ユニークな発想でご活躍されますようお祈りしています(千葉県 大伴 准)

■八千代座のこけら落とし公演の準備で忙しくしています。皆様、八千代座へ是非お越し下さい。(熊本県菊池市 城 恵一)

■今年から新たに「民族文化の境界領域に関する研究」3ヶ年計画を始めます。中国少数民族関係論の文化人類学的フィールドワークです。

(福岡市 丸山 孝一)

■60代に入ると老後が心配になります。子どもに頼らず同じ考え方の同じ世代が長屋形式の様な建物に住んで協力し合って老後を過ごしたい。その様な建物 or 協同体が有れば紹介して下さい。

(福岡県飯塚市 吉本 正紀)

■2兆円もの建設費がかかる「新福岡空港」問題はまだ議論の起こり方が少ないので、問題提起をしています。(福岡市 篠田 栄太郎)

■八女市八幡校区での住民参加のまちづくりを楽しんでいます。郷に入りては郷に従えの教えを遵守しつつ、美しい田園の暮らしをしているところです。八女方面においでの際はお立ち寄り下さい。明治43年築の地主館でお待ちしております。

(福岡県八女市 藤原 恵洋)

■ボランティアにて教育実験校づくり、百姓学校づくり、広葉樹植林などに参加しております。新しい日本人のありかたが見えてきた気がしております。

(愛知県 小早川 喬)

■今年2月福岡出張の折、時間をつくって伊都の国へ。志摩町の西林寺の諸堂・庫裡は真新しく、鄙に似つかわしからざる構え。鄙に見事な尊像があり、きけ

ば太宰府観世音寺の末寺だった頃、百済招来の金銅仏が村外要港の当地に一時置かれ、観世音寺本尊焼失時に同金堂に代わりとして移されるに際し、本像を賜ったとのこと。ミスマッチに不思議な感動を覚えた旅だった。(東京都 佐藤 正憲)

■ラテン文化センター・ティエンボのNPO法人化に向けて、ボランティアの理事をしています。スペイン、ポルトガル、中南米との国際交流に関心のある人は、御連絡下さい。経済、文化など対応可能です。URL:<http://www2.gol.com/users/tiempo/>

(福岡市 今村 昭夫)

■現在「雛人形」の研究をしています。日田に来られます時はぜひ、当家にお立ち寄り下さい。雛人形の王者といわれる「次郎左右衛門雛(江戸期)」を飾っています。(大分県日田市 原 次郎左右衛門)

■「情報連絡会」は約20年程続いており、年4~5回開催し、不特定の情報交換を行っています。前回は「近江八幡歴史散策」。このほか「エネルギーの自由化」「デジカメの活用術」があります。

(兵庫県 野田 浩男)

■毎回、足で稼いで、頭の中、心の中でまとめられた情報に感心しています。なかなか東京にいるコンサルタントの方々からはこうした情報が送られてきません。夏みかんの話が載っていましたが、我が家でも私は良く食し、子どもたちは独特の味がすると敬遠気味でした。(埼玉県 香田 寛美)

■いかなる情報誌にも優るすばらしい機関誌だと感心しています。一度、読者を全員集合させて研究会でも企画して下さい。グローバル大賞を競うようなコンペを企画するのもいいでしょう。

(京都府 小堀 脩)

■最近、毎月中国出張していますが、景気の悪さは日本と同じです。建築途中で工事を中止されたビルや待業(怠業でなく失業)者が町にあふれています。一方、IT技術者は引っ張りだこです。

(大阪府 宮川 敬章)

■近々、新日本法規から「Q&A改正都市計画法の解説」が出版されますので、是非読んで下さい。

(大阪府 坂和 章平)

■毎号、各号各方面の新しい情報に感動、感激です。NO50:美方町の記事には驚きました。私は「つちのこ探索」の縁で美方町に招かれて以来、役場や観

光協会の職員と情報交換しています。NO51：浮羽町の行政の対応に共感しています。長崎ぶらぶら節の記事を懐かしく拝見しました。

(広島県 松井 義武)

■韓国に赴任して1年が経ちました。こちらでは中国人に間違えられています。韓国語の発音が日本人らしくないし、顔を見るとどうしても中国人に見えるらしいのです。このごろは自分はアジア人だと答えることにしています。国籍は日本、住んでいるのは韓国、顔は中国…。駐在員の日記帳があります。時間のある方は見て下さい。http://www.fukuoka-

asia.net/pref/

(大韓民国 山下 雅弘)

■甘夏柑の話の中で「どうも剪定が一番効いたのでは」とありましたが、多分その通りです。果実の木は、一年おきくらいに当たり年があるのは知られていますが強めの剪定をうけたり、安穩に生育できないかも知れない異変があると、花を沢山つけ、実も沢山つけます。これは私の実家の畑での実感です。

(福岡県小郡市 大渡 剛弘)

ほかにも、まだ多くの声が皆様から届いております。続きは2001.9月号(NO.53)で紹介します。

地域データ散歩7

片親と子どもからなる世帯が増えている

山田 龍雄

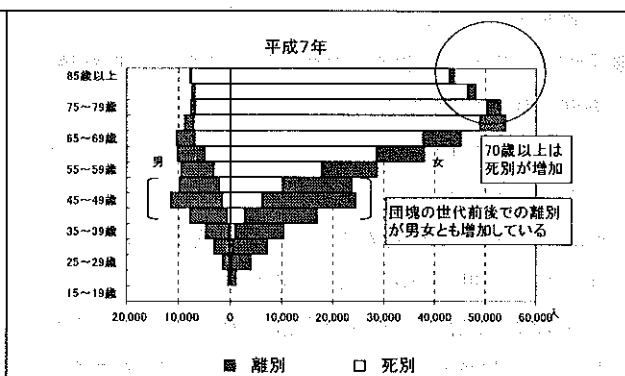
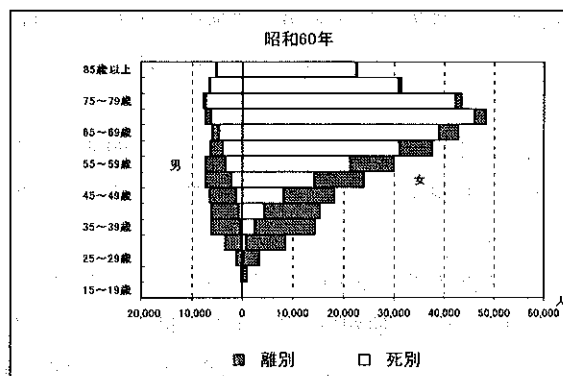
市町村のまちづくりの仕事において世帯数の動きを調べていると、「女親と子どもからなる世帯」と「男親と子どもからなる世帯」(以下「片親と子どもの世帯」という。子どもは配偶者がいない)が世帯数増加の半数を占める地域、あるいは全世帯数減少のなか「片親と子どもの世帯」が大きく増加した地域など、地域によって「片親と子どもの世帯」の増減の状況が異なっていた。

「片親と子どもの世帯」は、全国の総世帯数の約7%とその絶対数では少ないものの、市町村レベルではその増減が地域の社会構造と何か関わりがあるのかもしれない。そこで「片親と子どもの世帯」の地域別の特徴などについて、福岡県をベースに整理してみた。

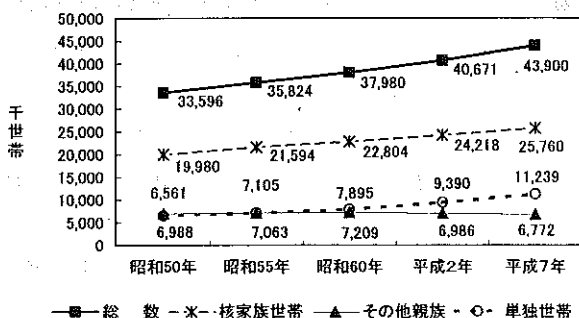
●団塊の世代の離別・死別が「片親と子どもの世帯」増加の大きな原因か。

まず「片親と子どもの世帯」になるということはどういうことか。大まかにみて、①親が離婚あるいは死

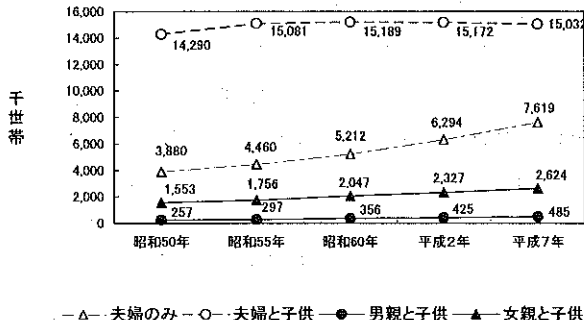
福岡県における年齢別の死別・離別状況



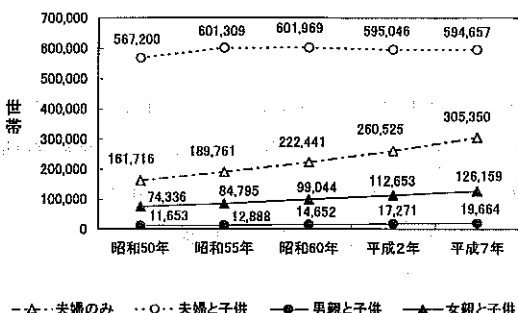
全国の世帯型（基本の3分類）の推移状況



全国の核家族世帯の推移状況



福岡県の核家族世帯の推移状況



世帯型の分類

- A 親族世帯：2人以上の世帯員からなる世帯員のうち、世帯主と親族関係にある世帯員のいる世帯
- ・核家族世帯（夫婦のみ、夫婦と子供、男親と子供、女親と子供）
 - ・その他親族世帯（夫婦と両親、夫婦と片親、夫婦と子供と両親等）
- B 非親族世帯：2人以上の世帯員からなる世帯のうち、世帯主と親戚関係にある者がいない世帯
- C 単独世帯：世帯員が1人の世帯

このように「片親と子どもの世帯」が増加してきている背景には、平成7年時点で団塊の世代であった45～49歳代の離別と、同時に60歳代以上の死別が大きく増えたことによるものと考えられる。

●「片親と子どもの世帯」は一貫して増加

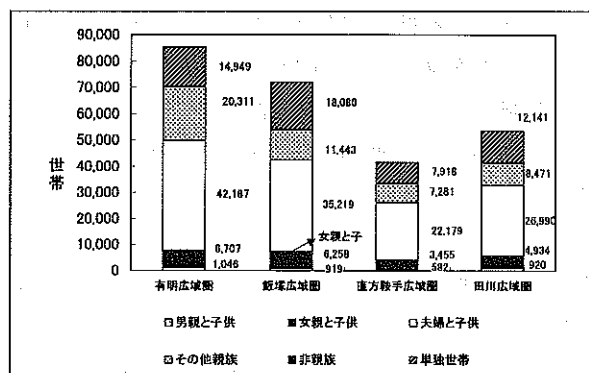
そこで「片親と子どもの世帯」の推移について、総世帯数や核家族の中での構成比など全国、福岡県の状況を世帯型別に昭和50年から平成7年までの推移でみると、以下の特徴がみられた。

- ・「夫婦のみ世帯」「単独世帯」「片親と子どもの世帯」は一貫して増加しているが、「夫婦と子ども世帯」「その他親族世帯」は少子化の影響によるものか昭和60年以降は減少傾向にある。
- ・全国の「片親と子どもの世帯」はこの25年間で1,810千世帯から3,109千世帯と1,299千世帯と7割強の増加となっている。

●「片親と子どもの世帯」の構成比は筑豊の3広域圏、有明広域圏で高い。

次いで福岡県内で圏域別の状況を見ると以下のような特徴がみられた。

- ・平成7年の全県の「片親と子どもの世帯」は約14万6千世帯で全世帯数の約8%を占める。
- ・地域別の「片親と子どもの世帯」の構成比は、筑豊地域の3広域圏は平均して10～11%と福岡県内の



「片親と子供世帯」の構成比が高い地域別の世帯型世帯数と構成比

広域圏の中で平均して2～3ポイント程度は高い。

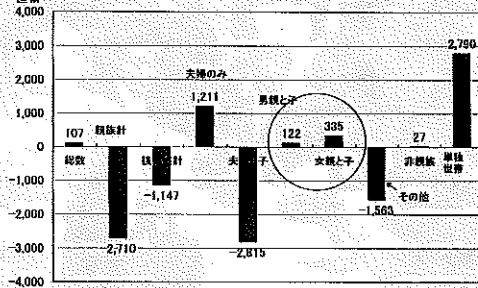
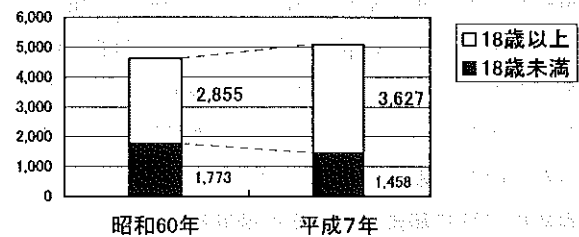
- ・また筑後地域では有明広域市町村圏が約9%と平均を上回っている。

●「片親と子どもの世帯」で特徴的な市町をみてみる

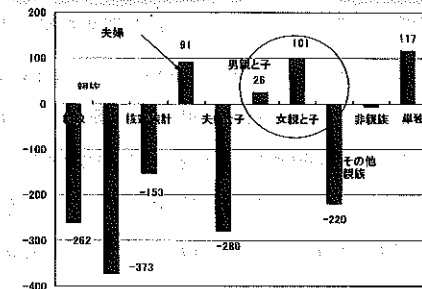
そこで上記に示した「片親と子どもの世帯」の構成比が高い筑豊地域と筑後地域の広域圏の中から、O市とS町をとりあげて、昭和60年から平成7年までの動向をみてみた。

O市は産炭地域であったが、急激に炭鉱関連の産業が衰退した地域であり、S町は農林業を主体とした過疎の町である。

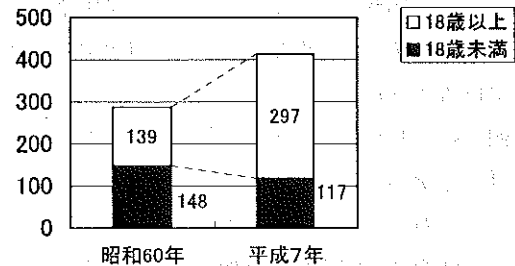
O市は核家族世帯の中の「夫婦と子ども世帯」(2,815世帯減少)と「その他親族世帯」(1,563世帯減少)が大きく減少しているのに対して、「片親と子どもの世帯」

昭和60年～平成7年の10年間で世帯型別の増減状況
《O市》子どもの年齢別の推移状況
《O市》

《S町》



《S町》



は457世帯増加、「単独世帯」は2,790世帯増加している。

S町はO市と比べて世帯数の規模は小さいものの、その世帯型別の増減傾向はO市と同様であり「夫婦と子ども世帯」(280世帯減少)と「その他親族世帯」(220世帯減少)が大きく減少しているのに対して、「片親と子どもの世帯」は127世帯増えている。

さらに片親世帯の中で子どもの年齢を区分したデータでみると、ここ10年間でO市、S町とも「18歳以上の子どもと同居する片親世帯」が増えている。

この辺りの事情は全国的な状況と同様、団塊の世代の離婚増加の影響なのだろうか。

これらについては、もっと詳しい調査をしないとわ

からない面が多いが、「片親と子どもの世帯」が増えた理由について当該市町の福祉課の方にきいてみると、近年に限っていえば、不況による男親の失業に伴う生活費減による離婚が挙げられ、中には離婚して母子世帯で生活保護を受けるケースも多いようである。また、一般的な傾向として、離婚に対する世間的な抵抗感が薄くなったこと、特徴的な点として、親の介護や生活を支えるために親元に残っている18歳以上の子どもも増えていることなども挙げられた。

今回は平成7年国勢調査のものでみているが、不況が続いている平成12年時点の世帯型データが公表されて追加分析をすれば、もっと興味深い結果がみられるかもしれない。(やまだ たつお)

自分が「できること」を持ち寄って 仲良くなろう

～パールレッツプラン主催の地域通貨講演会に参加して
澤谷 真紀子

長崎県北松浦地域で「地域通貨」に取り組んでいくための講演会があると聞き、ゴールデンウィークの最中ではあったが、佐世保市から車で30分程の佐々町へ行った。

この会を主催する「パールレッツプラン運営委員会」は、長崎県下で行われる、海洋クラスター構想の中の北松浦クラスター事業委員会から生まれた組織で、地域通貨をこれから広める実行部隊だそうだ。運営委員

会立ち上げのきっかけは以下の2点だと会員の松原年孝さんに教えていただいた(鹿町町の「なぎさの伝習所」(よかネットNO.47)からのネットワーク)。

①クラスターの中で、バイオマスエネルギーに関する研究を行っていたが、研究するだけでなく、これを地域で循環させるための手段として地域通貨を考えていきたい。

②地域内交流が活発になるためのきっかけとして地域通貨を考えていきたい。

昨年から当社では市町村の総合計画策定のお手伝いを多くさせていただいているが、地域内コミュニティ活性化の手段として地域通貨が意見としてあがること

が多かったが、私の頭にはマスメディアや書物での情報しかなかったことを悔やんでいた。この講演会は、地域通貨の教科書ともいえる「エンデの遺言〜根源からお金を問うこと」の著者森野栄一さんのお話も魅力であったが、もう一つ、「模擬交換市場」なるものも行われることになっており、実際に、地域通貨とはどのようなものかが体験できることも楽しみして行った。

●世界中で取り組まれている地域通貨

地域通貨のような地域独自の通貨に対しては、①地域づくり、②コミュニティの再生、③環境保全、④地場産業の振興などの期待が大きく、世界中で取り組まれているようだ。

例えば、北米の「レッツ」「イサカアワー」、スイスの「ディアバンク」、アルゼンチンの「RGT」などがあげられる。日本では、「さわやか福祉財団」が古くから時間預託制度に取り組んでおり、最近では色々な地域で「わくわく通貨」「ピーナッツ」「ありがとコイン」「ガル」滋賀の「おうみ」湯布院の「yufu」などの通貨を利用した地域活動が行われている。

基本は、自分の「できること」「してほしいこと」を登録し、それを見た仲間と「してもらう」「してあげる」関係が生まれる。その対価として地域通貨を「支払う」又は「受け取る」という循環が生まれる。

通貨としては、コインやチケット等での支払い、通帳への記入方式という方法がある。湯布院ではチケットと通帳を併用しているようだ。それぞれ地域にあっ



交渉が成立すると「アミーゴ！」と握手を交わした

た方式を試行錯誤しながら決めていっている。

●自分に何が「できるか」仲間に「何をしてほしいか」
楽しみながら改めて考えることができる

楽しみにしていた模擬交換市場では、事前に配られていた2枚のカードを使った。1枚は自分の「提供できるサービスや物」「希望するサービス」を記入するカード、もう1枚は「誰と」「何を」「何Pで交換したか」「相手のサイン」を記入するカードだった。ちなみに、この市場では通帳記入方式を採用し、P（パール）^④という単価を用いた（ちなみに、1Pは1円相当と換算した）。

その2枚をもって、参加者(約15名)と「サービスを受けた気になって」「サービスを提供した気になって」交渉を進めた。まず私が記入したのは「洗車のサービス」だったが、同じことを記入した人が多いことに驚いた。

ちなみに同行した所員は「出張ドブクロづくりサー

地域通貨パール 模擬体験交換市場

あなたのプロフィール 名前:

提供できるサービス物 (ご希望価格) (どんなことでできます、してみたい)	希望するサービス物 (ご希望価格) (どんなことでしてください。)	一緒にやりましょう
・おかない 300P	・洗車 1000P	
・農林・漁村体験の... 100P	・血洗い 300P	
・加工品商品販売時の 試食・試可 500P	・安全・新鮮な野菜 少量届けたい 1000P	
・お料理の相談 300P	・ペン・タペ・マシナ修理 の作り方も教えて欲しい 500P	
・企業PR請求 300P	・" 苗もわけて欲しい 500P	
・明のあいさつ... 100P		
・同好会活動 (絵画など) 1000P		

「こんなことしてみたい」、「地域通貨でこんなことができる」ということでOKです。遊び心で、まずは実際に考えて体験してみましょう。

地域通貨パールレッツ通帳(P) 冊目

月 日 ~ 月 日

ID 名前:

いつ	誰と(相手) ID 名前	何を サービス名	Pで 支払(→)	Pで 受取(←)	残高計 残高計	印 (印)
5/5	外村孝	お料理	1000	+	-1000	(印)
5/5	藤原 孝	お料理	800	+	-1600	(印)
5/5	"	お料理	-	+	-1500	(印)
5/5	岩手通義	お料理	-	+	-1000	(印)
5/5	"	お料理	1000	+	-2000	(印)
5/5	北谷隆雄	お料理	-	+	-1700	(印)
5/5	岩手通義	お料理	300	+	-2000	(印)
5/5	岩手通義	お料理	-	+	-1000	(印)
5/5	岩手通義	お料理	-	+	-700	(印)
5/5	岩手通義	お料理	-	+	-200	(印)
5/5	"	お料理	-	+	+100	(印)
5/5	"	お料理	-	+		
5/5	"	お料理	-	+		

2枚のカードを持って交渉を進めた

ビス」を売りものに記入したが、売れた様子はなかった。

参加者の間でワイワイガヤガヤと相談しあいながら楽しく進めていったが、以下のようなことに気づいた。

- ・人と会話しながら交渉することは楽しい
- ・自分の可能性を引き出してもらえる（「こういうことはできないの？」と尋ねられるため）
- ・サービス品を介して、お互い知り合える

地域通貨は、自分が「誰かのために何ができるか」をつかむヒントとなり、地域で薄れつつある「お互いさま」という意識の再生に役立つのではないかと感じた。

（さわたに まきこ）

筑豊を知り、もっともっと好きになりたい
という思いから生活情報誌が生まれた

～「筑豊くらしスパイス」の取り組み～

小田 好一

福岡県のほぼ中央に位置する「筑豊」は嘉飯山、田川、直鞍（※1）の3地域からなっている。県内にはいくつかの情報誌があるにもかかわらず、筑豊の情報を取り上げられることはこれまであまりなかった。

筑豊といえば、かつて炭鉱で栄えた地域であるが、相次ぐ閉山以来、沈滞ムードが広がって、いまなお続いている雰囲気がある。このような状況の中、筑豊を知り、筑豊をもっと暮らしやすい街にしたい、そしてもっともっと好きになりたいという思いから生まれたのが「筑豊くらしスパイス」である。

今回、「街づくりグループくらし応援隊」代表の麻生恵子さんに取材する機会があり、以下のようなお話をお聞きすることができた。

- ・去年の4月に創刊して以来、毎回5,000冊を2ヶ月に1回奇数月の25日に発行している。価格は200円（定期購読の場合は年間6冊＋送料で2,040円）となっており、売上による収益は、今の段階では必



表紙の貼り絵はすべて手づくりの作品である。

要経費がどうにか出せる程度だという。

- ・スタッフには子育て中の主婦が多く、雑誌の内容にもそれが反映されている部分が多い。例えば次のような感じだ。

筑豊くらしスパイスの主な内容

【特集】

- ・最新の6・7月号の特集は「公園へ行きましょう」だった。子どものいるお母さんの目で書かれているものが多い。これまでの特集についても興味深いものが多く、「筑豊お風呂三昧」「これでいいのみんなの介護」「行きたくなる学校ってどんなところ」「筑豊の恋愛と結婚」など幅広い年齢層をターゲットにしているのがわかる。

【むすんでひらいて】

- ・子育て支援の情報が満載である。幼稚園、保育園の概要のほか、一時保育施設なども掲載されている。

【ココがいいよ このお店】【筑豊名物】

- ・読者からの情報、製作スタッフの情報を集めてお勧めのお店、モノを紹介している。地域の資源発掘となる。

【こんにちは「ひと」】

- ・人の紹介はこのコーナーで行う。地域の人材発掘となる。

【市町村役場発 我が町自慢】

- ・筑豊の市町村を紹介するコーナー。ここでのポイントは「市町村役場発」ということだ。
- ・各市町村の広報・企画などを担当する方に、地域の自慢をしてもらう。行政の方に情報を提供してもらうことによって、読者の方が行政をより身近なものに感じ、さらに自分の住んでいる市町村を再発見してもらうことにより、今まで以上に自分たちの暮らす街に愛着をもってほしいとの願いがあるそうだ。

【探検！あなたの街の商店街】

- ・商店街の衰退は全国的な問題である。ここ筑豊も例外ではない。しかし、その中でもがんばっている商店街、ユニークな商店街はたくさんある。商店街だからできる利点やサービスなどの良い点を紹介することで大規模店舗にはない魅力を見つけてもらうコーナーである。お店の写真や、様々なコメント（オススメの料理、品物など）が書かれているため読者の興味をそそる。

【6・7月号からの主な新コーナー】

●筑豊で家を建てよう

- ・筑豊で家を建てたい人のための相談コーナー。筑豊に住みたい人に対して何かの助けとなると思われる。

●THE スパイス

- ・本誌は生活に密着した情報が多くなっているが、もう少し“スパイスの効いた”問題や深く掘り下げた問題を取り上げ、読者の方と一緒に考えていこうというコーナーである。6・7月号では石炭六法（※2）を取り上げている。

このほか、読者からのお便りのコーナーとして「くらスパ広場」がある。大手出版社から出版されるシティ情報誌に見慣れている私にとっては読者の年齢幅の広さを感じたものであった。お便りの一部を紹介しよう。（※原文を要約してあります。）

「これでいいのが日本のことば」

- ・先生に向かって友達のような話し方をする子どもが多いが、分からないのはそれにニコニコ応える先生先生はどう思っているのでしょうか。

「ちょっとじまん!？」

- ・うちの息子は4月で2歳になりますが、誰かに似てると言われます。それはイチローです。今度写真を送ります。

「両親が結婚した頃の思い出でばなし」

- ・私の両親は結婚して73年になります。戦争で父は兵隊にとられ女手一つで5人の子供を育てました。子供のためなら母は強いです。おかげで私の人生があるのです。両親に悔いが残らないよう尽くしていきたいと思います。

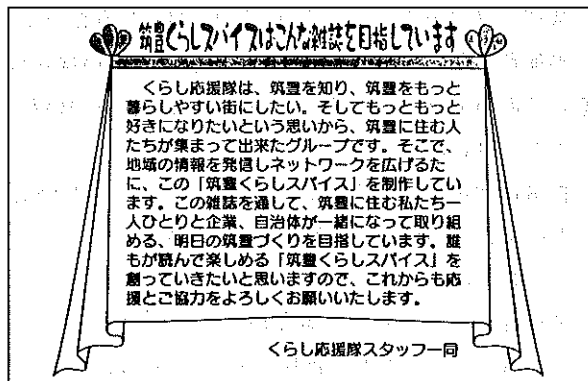
現在は、筑豊のみの販売であるが、今後、福岡、北九州など大都市での販売を促進、ホームページも今秋ごろに開設予定である。これからの夢は両大都市圏からの集客もねらい、明るく、活気ある筑豊になるよう願っているということだった。興味のある方は是非ご一読を！

(おだ こういち)

街づくりグループくらし応援隊事務局
TEL (0947) 42-3977

※1 嘉飯山（かはんざん）：嘉穂郡、飯塚市、山田市で構成されるエリア。田川：田川市、田川郡で構成されるエリア。直岐（ちよくあん）：直方市、鞍手郡で構成されるエリア。

※2 石炭六法：炭鉱閉山後、石炭六法と呼ばれる6つの法律によって筑豊などでは地域振興のための財源の確保、雇用対策が行われてきた。平成13年度末に失効が余儀なくされており、筑豊の自立が求められている。



スタッフの意気込みが伝わってくる。

琉球舞踊を堪能しにいく

「めでる華ごころ」

尾崎 正利

■沖縄ことばあそびの縁で、琉球舞踊の会へ

事務所の会議室では「ゆんたくの会」という沖縄ことば遊びの会が定期的に開かれている。この会は西表宏先生（香蘭女子短期大学）が世話役をつとめ、参加者は沖縄県出身の70代の福岡の男女である。

戦前の旧制小・中学校時代までを沖縄県で過ごし、その後、戦時中から戦後にかけて疎開や進学で故郷を離れて戦後を全国各地で過ごしたのち、福岡で熟年期を迎えたこの方々は、戦前の沖縄ことばや風物を純粋に記憶に止めている貴重な存在といえる。

月に1度の集まりは、琉歌や草子を通じて言葉をたどるのだが、文法や用語のカタイ話もあれば、話が脱線して時には色めいた話になるなど、つかみどころのない点がこの会の最大の魅力だと思う。私は昨年8月から参加させていただいている。

そんな折、西表先生から「琉球舞踊の会」の案内が寄せられた。曰く「今世紀最後というくらいの9人の名人のラインナップ」とのこと。円熟の域に達した沖縄を代表する踊りの名手がこれほど一時に揃う機会はないということらしい。しかし、聞いてみると「明らかに宣伝不足だから、800名収容の会場でヘタすると100名しか来ないかも」（西表先生談）と何とも心細い。

急遽、事務所の内外で興味のある方に呼びかけたところ、10数名の応援観踊メンバーができた。

5月10日の夕方、福岡市の電気ホールに行くと、



9人の踊り手と、9人の地謡方が出現した

会場には大勢の人が来ていた。心配は無用であった。我々はゆっくり出かけたため、もう2階席しか空いていなかった。

席に座ってすぐに開演時間となった。最初の演目は宮城幸子さんによる「稲まづん」。その日の最初の演目というのは、見る方も舞う方も緊張感が満ちていると思うのだが、ステージではそんな張りつめた空気を感じさせない静かな手足の動きで、名人が舞台のソデからしずしずと登場した。

次々と演目が進んで、観客からは暖かい拍手が送られる。いただいたパンフレットをみると9人の名人は玉城流、太圭流、真踊流などの流派で、いずれも60代前後である。若い男女の仲を演じた踊りや、若い娘たちの踊りなどを軽やかにこなす身のこなしは、本当に若々しく表現されていた。

途中、解説の時間では、西表先生による琉球舞踊についての説明がなされた。それによると、琉球王朝時代に宮廷内の限られた人々の間でたしなまれていた舞踊が、明治時代に入って徐々に庶民たちの間に伝えられて、庶民の踊りの要素とミックスされるようになり、それが今の琉球舞踊のベースになっているということだ。それでも今もルーツの名残はあって、例えば舞台

への出方などにそうした痕跡をとどめている。

この日の演目は、器楽演奏者たちによる演奏と踊り手の総踊りで締められた。終わった後、会場を出る人も一様に満足げだった。この日の来訪者が1000人前後であったと後日聞いた。(おざきまさとし)

今年も多くの方に集まって いただきました

～第9回よかネットパーティー報告～

5月19日、五月晴れのさわやかな土曜日、第9回よかネットパーティーを今年も天神のど真ん中、警固神社で開催しました。

●そもそもよかネットパーティーとは？

私は4月に入社した新人ですが、入社した当日の朝会から早速よかネットパーティーの話し合いは始まりました(朝会とは毎週月曜日に全員で仕事や、一週間の予定等の確認をするものです)。毎年、面白い話、おいしい食べ物で賑わうパーティーですが、だんだんお客様が増え、去年は120名になっていました。120名のお客様を所員11人と数名の協力者でお世話するのは限界に達しているの、いかに作業を減らし、パーティーの質を下げないように所員で分担するかが今回のテーマでした。

毎週月曜日の話し合いの中では、手間のかかる作業を見直そうとするあまり、持ってこられた品物をどうするか、いつも用意する皿の文字はどうするかなど、目に見えるモノの話に集中してしまいました。なんだかパーティーは大変だというマイナスイメージも漂ってきたとき、そもそもよかネットパーティーの目的は何かという意見が出ました。「このパーティーを始めた当時、モノ中心の社会への反抗として、面白い話しを持ち寄ったパーティーをしよう、話だけで表現しきれない人はそのネタの元となる品物を持ってきてもらおうということではなかったか。また、このような人と人とのつながり、知り合いを増やす活動もやる会社だということをPRするために始めたのではないか。」ということでした。原点を一度確認することで、何を省略してどこに重点を置くべきかが明確になってきました。私はこの話し合いの中で、企画とは前例をそのまま踏襲するのではなく、目的を確認した上でどうするかということが重要なのだと感じました。

所員が当初の目的を達成するために、

- ・パーティーの準備の負担を最低限に抑えること。
 - ・受付で人がたまってしまう、そこに人手が集中している現状を解消すること。
- という2点が挙げられました。

この対策として、まず、前もって料理を出せるよう事前に送って頂けるものは送ってもらい、当日は所員誰もがテーブルの上に気を配ることを合意しました。次に一番人手がかかっていた受付は、セルフサービスでやっていただく仕組みにし、首から提げるタイプの名札に、ご自分で書いてもらったり、協力費は箱の中に入れてもらいお釣りをとってもらうような形式にすることになりました。

前日に続々と届くパーティーへの品物は、中を開ける度に歓声やどよめきがおこり、会議室の机は珍しいものが所狭しと並べられました。所員は先に食べたいのをぐっと我慢し、家路につきました。

そうして迎えた当日、やはり箱に手を入れて、お釣りをとってもらおうというのは難しかったようですが、会場が一番広い部屋だったこともあり、続々と来られるお客様がスムーズに中に入られ、名札も楽しんで書かれていたように思います。何より相手にはっきりと見えた今回の大きな名札は、名前の他に何か書いてもらうような欄がありましたので、そこからパーティーの目的である「人もうけ」の一つの手段になったのではないかと自負しております。皆さんはいかがでしたでしょうか？

●どぶろくって???

パーティーの1週間前より、今年も恒例の「どぶろく」づくりが始まりました。今、当たり前のように書いていますが、夕方、先輩所員が「どぶろくを作るぞ」と他の人を誘ってお米を買いに行き、皆が仕事をしている側でぐつぐつとお粥を作りだした様子を「どぶろくとは何？何で今から作るの？」とぼんやり遠目で眺めていました。後になってこれが酒になり、毎年これでパーティーの乾杯をしているということを聞いて、自分で酒を作り、更に乾杯の時に飲んでもらうとは、自分が入った会社とはいえ、ただものではないなと感じ入ってしまいました。また、いくら米とこうじで作れるからといって、このように自分で作るような人がどれくらいいるのだろうかとも思いました。

さて、常温での発酵から、冷蔵庫での熟成の段階へ

と工程が進んでからは、去年、冷蔵庫の中で容器に密閉したどぶろくが暴発したこともあって、冷蔵庫には「どぶろく注意」の張り紙も貼られて、その様子を所員で始終気にしていました。1週間後、自家製どぶろくは、心配していた爆発もなく無事？出来上がりました。ただ味の方は……。

パーティー当日、私はもう一人、自家製のどぶろくを持ってこられた方に出会いました。3種類のどぶろくを持ってこられていて、「俺が作ったから飲んでみい」と、お薦めのフルーティーで甘いお酒を頂きました。実をいうと、お酒（ビール以外）がまだ苦手な私ですが、こちらは飲みやすくおいしかったです。

どぶろくを通して、それが造られるまでの過程を見たり、作られた本人の人柄に触れながら味わう自家製というものの魅力を感じた1日でした。

(あいこう みほ)

●毒か薬か!? 25年ものハブ酒

今回、私はパーティー初参加だったので、一品持ち寄りに何を出したらいいか、とても悩みました。社内

■よかネットパーティー異聞録

大盛況で過去最高の140名を超える方々の集まりでした。多くの方々の手伝いがあり、なんとか円滑にパーティーを進めることができましたが、逆に11名の所員だけで行えるパーティーの限界を越えつつあると感じました。お客さまの中からは「もう少し品があるほうがいい」「仲間内の飲み屋のようになっている人もいる」という意見もでていました。私たちの事務所の中では次のような意見がでていました。

- ・格安の宴会場と勘違いしている人もいた。
- ・身内だけで集まって座り込み、通路をふさいでしまっている人が多かった。
- ・ゲスト・ホストにともに快いマナーとは何だろうか。
- ・持ってこられたものを左から右に出すだけのパーティーでよいか。
- ・料理や受付などが忙しくて、誰とも話せなかった。
- ・靴がなくなっている人が1人おり、結局見つからずじまいだった。

などです。次回のパーティーをより良いものにする環境づくりは試行錯誤が続きます。

(所員一同)



左上：初の試み
受付セルフサービス
左下：うわさのハブ酒
右上：人気だった焼き穴子
右下：健康志向
ヤーコンそうめん

で、「お酒が大好きなので、宴会部長になりたい。」と宣言した手前、お酒以外のものを持参するのはなにより後ろめたさがあり、かといって貧乏新入社員には、パーティー参加者の舌を満足させるような良いお酒を入手する術もありませんでした。

そこで、思い出したのが母方の実家で、押入れの肥やしとなっているハブ酒でした。そのハブ酒は、私の父が25年ぐらい昔に、沖縄で仕事をしていたときに、手に入れたものらしく、嫁さん（私の母）をもらうために買ってきたものだったそうです。今でもりっぱなハブが、瓶の中にトグロを巻いている姿は圧巻だったので、飲むものではなく、見るものとして驚かしてやろうと持参したのです。

パーティーの会場では、ハブを見てびっくりする人、いぶかしげににおいをかいでみる人など、反応は様々でした。もともと度数が高いお酒な上に、25年もの

歳月がたっているため、まるでスピリッツのようなきついお酒になっていたのですが、意外にも女性の方が、かなりの量を飲まれていました。誰かが「美容と健康にいい」などといったのかもしれませんが。偶然にも、以前そのハブ酒をつくっていた会社で働いていた方がおられ、ハブのうろこの模様が大島紬のもとになっていることなど、ハブにまつわる話をいろいろ教えていただきました。“沖縄ぎのわんハブ酒”と書かれた沖縄らしい色使いのラベルを見ながら、「社長を思い出すなあ」と感慨に深そうな姿が、とても印象的でした。

ただ残念なことに、そのハブ酒の酒造はすでに存在していないそうなので、もし自分の舌でハブ酒を味わってみたい方は、まだ残っていますので、来年のパーティーを楽しみにしてください。（本田 正明）

近 況

お金と手間をかけないお手軽国際交流活動

去年の夏に「ヤングネットワークウイング九州」（旧九州青年の船）に参加した。その事後活動として何かボランティア活動が課せられる。

日本人の学生は英語ができないことなどの理由で留学生を避ける傾向にあり、留学生は日本人の友達ができにくいということが、この活動のきっかけである。まず、留学生と仲良くなる機会をつくろうということで、12月に開催した第1回交流会では一緒にレクリエーションや料理をしたり、日本で生活する上での

悩みなどについてディスカッションを行った。（よかネット NO.49 参照）

今回はこれまでの交流会に参加した留学生からの声もあり、山登りになった。

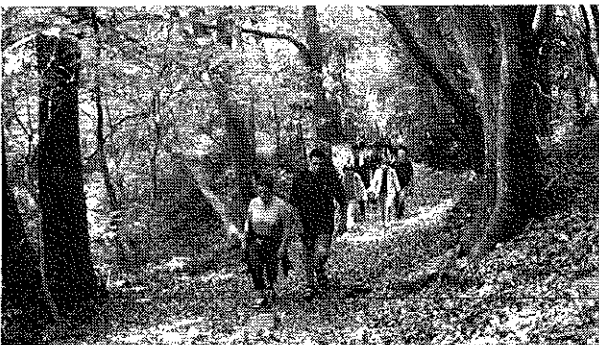
これまでの活動のPR、活動場所は九大留学生会館に協力していただいている。今回についてもPRのポスター、申込用紙・ポストの設置、雨天の場合のレクリエーションの場所の提供を協力していただいた。また、同会館の森山先生には活動のPR方法や、他の国際交流団体との交流の機会についてアドバイスをいただき、PRについてはポスター以外に九大留学生会のホームページに載せていただき、幅広いPRが可能となった。

場所は拠点となっている九大留学生会館から歩いて30分ほどで行ける立花山(367m)にした。麓から山頂まで約40分。山頂で昼食を食べて、下山し、会館まで戻って来るというコースである。昼食は各自持参にした。できるだけ主催側の負担を減らし、お金もかけないという交流活動である。

外国人参加者はコロンビア、モロッコ、中国からの留学生で計7人の参加だった。当日の日本人参加者は8人だった。当初の留学生の申込者は24名だったが、こちらの手違いで7名になってしまった。しかし、日本人:留学生は1:1程度になって良かったと思う。24名も参加があれば、みんなと会話もできない上、突然いなくなっても気づくのが遅れる心配があるからだ。

立花山は福岡市東区に位置し、市街地と隣接しているながら豊かな自然を有する山である。留学生の全員が驚いていたのが、流れている水が飲めることだった。また、途中、ヘビやトカゲ、シャクトリムシなど日頃見かけないものが姿を現し、市街地の近くにもかかわらず豊かな自然があることに驚いていた。山頂からは留学生たちの生活圏を一望することができ、興味深く眺めているようだった。

今回の山登りは準備するものも少なく、お金もかけない、お手軽国際交流企画だったが、留学生の感想は上々だった。次は、暑さがやわらぐ9月以降に何かしたいと考えている。(小田 好一)



改めて日頃の運動不足を感じた山登りだった。

図 甘夏の怪—また

前号の「甘夏の怪」に、沢山の方から「面白い」という感じと、自分なりの思い出とが重なった反響をいただいた。ところが、わが事務所内から反撃を食らった。「1955年までに、なぜこんなに砂糖消費が急増したのか、理解に苦しむ」という話だった。「なるほど、なるほど、45才以下の年齢層には、戦後砂糖消費がゼロだったことなど分らんのか」と思った次第。と

いうことで、「また」の駄文を書きます。

＜1947年の砂糖消費量は、1家族4.7人で225グラム＝4グラム/人・月＞

コーヒーに付いて出てくるスティックシュガーが、少ないものが3グラム、多いのは10グラムぐらいである。もちろんコーヒーなど無かったので、家庭の料理に使ったものの総量ということである。一般の家庭では白い砂糖など見ることは無かったと思う。当時はあらゆる旅に米を持っていかなければならなかった。私の体験では、倉庫業をやっているところの学生さんが、米の代わりに砂糖をもってスキーに来たので、真っ白な砂糖を見たことはある(倉庫業をやっていると砂糖の生産ができたのかな)。

データを少し続けると、48年が713グラム/年、49年が750グラム/年、50年が3,525グラム/年、51年9,377グラム/年、52年12,454グラム/年となっている。52年の消費は、212グラム/人・月となる。5年間に50倍になっている。

＜砂糖消費が「なぜゼロだったのか」という質問＞

この質問にはなかなか答えにくい。「無かったから」ですませたいが、そうもならないので、少し別の話をする。1983年に、「一人っ子」政策をはじめて2～3年目の中国に行ったとき、中国人はスリムで健康的な感じだった。数年して、また中国に行ったときは「かなり太ったな」と思うと同時に、以前の精悍な感じが消えていた。特に小皇帝という「一人っ子」が大切にされすぎていた。昼時の街角に、30歳代の女性(少しは男の人も)がたくさん集まっていて、何かと聞いたら、そこは小学校で、小皇帝を出迎えに来ているということだった。

今、北朝鮮は食糧不足だといわれ、スリムすぎる人達の写真が新聞にでたりする(先日金正日総書記の息子といわれた人が、成田空港でジャーナリズムの前に現れたが、こちらはずいぶん太りすぎのようだった)。戦後、47年頃までの日本人は、今の北朝鮮の人よりやせていたかもしれない。

すこし、1950年頃の日本を振り返ると、当時は「三白景気」が起こっていた。三白とは米・紙・塩・蠟・砂糖等のことだが、この頃は米が配給で塩は専売、砂糖は輸入の為の外貨が割当制になっていた。そして「国内製糖業の保護」と称して高い国内価格を維持したので、砂糖を扱う会社が大儲けをしていた。政府の割り

当てさえ得れば、莫大な利益が転がり込んだのである。当然「砂糖疑獄」といった見出しの、汚職摘発の新聞記事が連日出ていた。それも52年頃になると砂糖が沢山出回るようになり、「あまみ」も消えて一般の商品になっていった。このプロセスを経て、砂糖の消費が50倍になったということである。

図『山の郵便配達』という映画を見た

この映画は、飯沼さんの強力な推薦をうけて、神田の岩波ホールでみた。案内をいただいたあと、東京に行く機会があり、見たあとであちこちに宣伝したので、私を媒介にした飯沼さんの被害者も発生している。にもかかわらず、飯沼さんに感想の便りも礼状も出していないので、催促を受けていて当惑中である。

では、なぜ書けないのか。それは岩波ホールで感じた雰囲気にある。昔、田舎の小学校の校庭で映画を見たときは、アラカン(嵐寛寿郎)が馬に乗って現れると、一斉に拍手が起こった。もちろん岩波ホールで拍手などは起きない。しかし、この映画のそこかしこで、「ざわ」、「そよ」、「クス!」と空気が動くのである。東京・岩波とくると「無機質の権化」みたいに感じやすいのだが、その場所は、いやに「ホンワカ」としていた。

これはなんということであろうか。映画のせいなのか。神田という土地柄なのか。東京の人も岩波も「ホンワカ」としているのか。東京の人は、格好を付けずに気分を表現するのか。当日は、220の席が中高年の女性で満席だったが(私が数えたところでは17人の男性がいた)、そのせいで空気が動いたのか。えらい難題を背負ってしまった。これを解決するには、もう一度別のところで見るしかない。

実は、福岡でも百道浜の小さい映画館で、上映されていることが分かった。それで、「いつでもいける」という気分と、「何人か新たな被害者を連れていこう」ということから、なかなか行けないでいる。しかし6月の22日までには行かねばならん。

この映画は、1980年代初頭の中国湖南省の山岳地帯で、郵便配達の父が、あとつぎの息子を連れて二泊三日の配達仕事の話である。テーマは「親子・家族」といったことであろうか。見ながらいろいろ考えたが、それは1980年代ということにかかわっている。中国は1976年に毛沢東がなくなり、文革派も失脚した。78, 79年には米国や日本と国交正常化をし、80, 81年には文革を否定し、四人組が裁判にかけられた。

1983年秋、長江流域の都市を訪れたとき、湖南省の省都長沙市にも行った。毛沢東の巨大な像は健在だったが、人々は何となく「ホンワカ」していた。1989年には天安門事件が起こり、それ以後、少し「ホンワカ」は消えたようだ。

(糸乗 貞喜)

図審査される側から審査する側に～マンション大規模修繕の業者説明会で感じたこと～

今年、私の住んでいるマンションが建築後12年を経過し、大規模修繕をすることとなった。大規模修繕の話は、既に3年前頃から管理組合で進められていた案件であり、今年の4月に管理組合総会にて事業計画が承認され、実施することとなった。

このマンションは自主管理となっているため、管理組合の各理事は、毎年の当番制となっている。

私に、この理事の役目が回ってきた。今年の主要事業である大規模修繕の実施に向けての話し合いが4月より進められており、先ず、工事業者をどこにするかが大きな検討事項となった。

昨年の理事会で業者を3社まで絞り込んでいたので、今年の理事会では、この3社の候補業者の中から1社を選定することになった。選定の方法としては単純に入札で決める場合も考えられるが、「工費は安いが質が良くない、では将来の財産として問題となる」という意見もあり、業者の説明を聞き、話し合いで決めることとなった。そこで、4月末に3業者の説明会を実施した。私は市町村のまちづくり計画などのプロポーザルで、毎年、審査される立場になることはあるが、初めて審査する側になった。その時に選定する側の立場として、次のようなことを感じた。

- ①全く当たり前であるが、短い時間で分かりやすい説明、プレゼンテーションができていくかどうか。これは説明者の力量、訓練もあるようだ。(パソコンのプレゼンテーション用ソフトを使った説明を行った業者は、手際もよく最も分かりやすかった。)
- ②他社と違った独自の技術提案、あるいはオリジナルの提案ができていくかどうか。

(1社は現況調査をよく行い、これに基づいた技術提案を行っていた)

- ③質問に関しては曖昧に答えると印象は悪い。(分からないことは「分からない」と答える方が良い。)

この後、理事会を2回行い、業者選定の話し合いが進められている。

(山田 龍雄)



「シリコンバレー」のつくり方

東 一眞

中公親書

●日本にシリコンバレーは生まれるか？

深刻な不況にあえぐ日本では、なんとかIT産業によって経済の活性化を図ろうと、てこ入れを行っているのだが、なかなかその成果が現れていないように思う。

本書では、筆者がアメリカのテクノロジー都市と呼ばれる地域をこまかく調べることで、なぜ成功する地域とそうでない地域があるのかを丹念に分析している。その分析によって浮かび上がってきたものが、

- ・大学や研究所のような「知識の源泉」
- ・資金と経営のノウハウの源泉
- ・地域プランナーと地域協力

の3つであり、これらがいかに「距離的に近い」ところに存在するかが成功の鍵となっている。

インターネットの普及によって、人々は距離から解放されたといわれる中であって、距離的に近いことがIT産業の要だといわれると、なにやら矛盾を感じてしまう。だが、情報源から地理的に大きく離れると極めて重要な情報が実感として伝わりにくくなるといわれると、なんとなくわかってくる。コンサートやプロ野球の試合をテレビで見るのと現場で見るのは、質的に大違いだからだ。

さらに、先日、福岡で行われた筆者・東さんの講演会で「いかに情報が集まろうとも、それを結びつける地域プランナーの存在がなければ、シリコンバレーは生まれない」とおっしゃっていた。化学反応に触媒が必要なのと同じように、テクノロジーが形成される過程には、地域のために懸命に働く人物が必要なのである。優秀な人材を発掘し、厚い信頼を得ることができる能力をもち、なおかつ、お金や知識をもつ人たちを結びつけることのできる人物が、まだまだ日本には不足しているようである。

最後に筆者は、そのような人物が日本に現れることを待望して筆をおいているのだが、私はそのような地域プランナーを目指したい、と強く思った次第である。

(本田 正明)

＜福祉セミナー開催のお知らせ＞

近年、当社でも高齢者、障害者、母子など、健康や福祉に関する仕事のお手伝いが増えています

色々な人の活動や考え方をうかがう中、「我々だけで聞くにはもったいない」と感じております。

そこで、今後、必要性や活動の重要性が予測されることをテーマに、福祉セミナーを3～4回程度を目途に連続で開催いたします。興味のある方は当社の澤谷、山田までご一報を。

○第1回：『ボランティア』っていったい何？

講師 山下恭平さん

日時 平成13年7月26日(木)16:00～

場所 アクロス福岡 601 会議室

○第2回：『NPO』のあるべき姿(仮)

事業体として成り立つNPO組織の代表を予定。

○第3回：「核家族への子育て支援(仮)」

子育て支援として、家事支援だけでなくメンタルケアを行うグループの代表を予定。

編集後記

図「うーん・・・割付が合わない」なんで間違えたの?・・・」と向こうの作業台で一人悲しくつぶやく声が聞こえてきます。見ると本誌の原稿割付中。毎年この時期の号では新人が中心となり編集作業を進めます。スケジュールを気にしながら、人の原稿を読みやすく編集する作業はいままで経験がなく、初稿が出来上がるまで不安の連続だったもよう。それでも原稿の内容確認や追加、訂正依頼を遠慮がちなが物怖じせず先輩社員にキチンと伝える姿には頼もしさを感じました。(ざ)

よかネット No. 52 2001. 7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハビエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130